



おおらかに、したたかに

Heart and Mind

永田円了

僕には夢がある！ だけではメシは食えない。その夢を実現するには、周到なしたたかさが必要になる。武士は食わねど高楊枝では、現実の世界では何事も前に進むことはない。

実際には、夢多き“おおらかさ”と、現実を見据える“したたかさ”がバランス良く働いて、はじめて物事は成就するのである。今回は明治維新のカリスマ的偉人、渋沢栄一と坂本龍馬を事例にとりあげる。二人に共通するものは何か。渋沢と龍馬のエネルギーの源はいったいどこにあったのか。

共通点 その① 幼年期のくやしい体験

渋沢と龍馬に共通すること、それは幼年期のくやしい体験である。父親が代官に無理難題を押しつけられ、頭を下げ続ける姿を見て心を痛める。子供ながら理不尽な上下関係を許す社会のあり様は、なんと承服できないものであった。

土佐藩の下士に生まれた龍馬は、上士の横暴で病身の母親が、目の前で息絶えるのを経験する。渋沢と同様、当時の身分制度の理不尽さに打ちのめされる。二人のこの痛ましい体験が、後の社会変革の原動力になろうとは思ってもいなかったであろう。

共通点 その② おおいなる夢

慶応3年(1867年)、徳川慶喜に仕えていた渋沢は、パリ万国博使節団の一員として随行する。渋沢28歳のときである。当時の日本には及びもしない近代化したヨーロッパの姿を目の当たりにした渋沢、夢が大きくふくらんだ。

薩長同盟、大政奉還を成し遂げようと奔放する龍馬に長州の桂小五郎が問う。「長州と薩摩の盟約を成し遂げたら、君は薩摩に取り立てられるのか」「僕らを結びつけて、君に何の得があるのか」

龍馬曰く「いつか土佐にいる親兄弟をみんな船に乗せて、世界中を見て回る夢をもっとるがよ」。この二人の巨人の中には“私欲”を離れた大いなる夢がエネルギーの源となって存在した。



共通点 その③ 周到なしたたかさ

パリから帰国後、渋沢は福祉事業にとりかかる。一時は政府にたよって事業を始めるが、時は富国強兵の世、福祉にまで資金がまわってこない。さあそこで渋沢のしたたかさが芽を吹く。渋沢はチャリティーに目をつけた。政府高官や財界人に働きかけ、日本初のチャリティーバザーを開いた。バザーの売り上げは、3日間で7500円(今の金額で6800万円)にも上った。

薩長同盟がもう少しのところまで頓挫したとき、龍馬は西郷に申し出る。「手土産をもって行くがはどうじゃろう。申し訳ないことした時は、ゴメンちゃと言って手土産の一つでも持って行くのが当たり前でしょう」。「例えば、軍艦10隻、ミニエー銃1万丁。そしたら長州も機嫌を直してくれるかもしれません」。龍馬のおおらかさの振り子が、したたかさに振れた瞬間であった。

260年続いた江戸時代の封建制度が崩壊し、武士も庶民も平等に生きることができる社会が実現できたのは、この二人の夢と実行力なしでは語ることはできない。

<事例 DVD等>

朝ドラ「あさが来た」成瀬仁蔵と広岡浅子/おおらかに、したたかさ
 渋沢栄一&坂本龍馬/幼年期のくやしい体験が原動力
 渋沢栄一/パリ万国博覧会へ/西欧の進んだ社会の姿を見る
 坂本龍馬/桂小五郎との対話/夢を語るおおらかに
 龍馬と西郷との対話/手土産をもって長州へ/したたかな計画
 岩崎弥太郎/ただ金儲けをしたいだけ、大義がない
 杉山奈津子/偏差値29から東大へ/おすすめの習い事は二つ
 歌・マライア・キャリー「ヒーロー」/ヒーローはあなたの中にある

